

まちかど

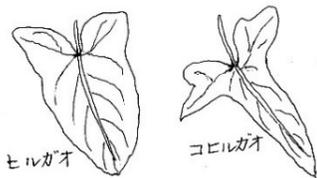
●荇原第一地域新聞●

花めぐり

ヒルガオ



「昼顔」という言葉から、古くはカトリーヌ・ドヌーヴ主演の映画、近年では禁断の恋を描いたテレビドラマを連想される方もいらっしゃるでしょうか。さて、こちらのヒルガオは、淡いピンクの花が少女の雰囲気です。日中に道端や植え込みの中などでつるを伸ばし、4〜5センチの花を咲かせます。似た花に



コヒルガオがあり、やはりピンクの花をつけますが、花は小型で葉の形状が異なります。いずれもほとんど結実することなく地下茎で増える多年草です。やっかいな雑草として刈り取られることも多く、見かけることも少なくなりました。

写真は後地小学校の近くで、また、コヒルガオは林試の森の水車門近くで見られました。

花言葉は、優しい愛情・絆・友達のよしみなどです。

ヨーロッパ原産のセイヨウヒルガオ（白花・淡紅色）の花言葉は「危険な幸福」、「昼の美人」とありました。（小山1丁目町会 河原マサ江）

様々な模擬店が立ち並びました。焼きそばやカレーライス、クレープにフルーツポンチなど、朝から町会の皆さんが腕によりをかけた品々に、多くの人たちが行列を作りました。また、小学校PTAや中学校の生徒たちによるカキ氷やジュースなどの販売、児童センターの職員によるゲームコーナーなど、どの店にも子どもたちの楽しそうな笑顔がはじけていました。

日中の最高気温が33度を記録したこの日、スクエア荇原内イベントホールも大勢の人たちの熱気に溢れていました。

地区委員会による子どもまつりのブースでは、迫力満点のローラーコースターやキラキラ絵に射的など子どもたちは夢中になって遊んでいました。

また、ステージ発表では、この日のために練習に励んできた子どもたちが、ダンスや吹奏楽などのステージを披露し、観客から盛大な拍手が送られていました。

まつりの最後は、恒例の盆踊りで夏の夜を



暑さ以上に賑わった区民まつりの様子

荇原第一地区区民まつりが、7月15日(土)にスクエア荇原で開催されました。当日は朝から強い日差しが照りつけ、今年一番の暑さを記録した真夏日の開催となりました。

会場のスクエア荇原の広場に

区民まつり賑わう
スクエア荇原に6155人

彩りました。今年は、「八潮」の地区名が新たに加わった「品川音頭2017」の曲目も披露され、各町会の皆さんやお客さんたちによる妖艶な舞に酔いしれました。

今年の区民まつりには、6155人もの大勢の方々にお越しいただきました。ご来場いただいた皆様、また、区民まつりに従事いただいた地域の方々、本当にありがとうございます。おつかれさまでした。（事務局）

盲導犬を知ろう

荇原第一地区支え愛セミナー

荇原第一地区支え愛セミナーが、6月20日(火)に荇原第一地域センターで開催されました。このセミナーは、困った時はお互いを支え合い、障害のある方への接し方を学ぶことで、自分たちに何ができるのかを考える機会として行われました。

今回は「盲導犬を知ろう」をテーマに、盲導犬ユーザーの石田信子さんと、盲導犬のネリーちゃんをお招きしました。

石田さんは、盲導犬の役割やユーザーとなつたきっかけについて話しをし、「街で盲導犬を見かけても、盲導犬は仕事なのでさりげなく無視してもらえれば」と話していました。さらには、視覚障害者にとつて、慣れない駅のホームは非常に怖く、自分から援助を求めることも難しいため、「ぜひ皆さんの声かけしてほしい」と訴えました。



講演する石田さんとネリーちゃん

最後に参加者には、修了証が配布されました。石田さん、ネリーちゃん、ありがとうございました。（事務局）

わが家のペット

～ハンナとコタロー～

わが家に、ヨチヨチ歩きの子ネコがやってきたのは、4年ほど前のこと。娘が、友人から2匹の雑種をもらい受けたのです。1匹は白黒のブチのメスで、名前は「ハンナ」。もう1匹が真っ黒のオスで、「コタロー」と名付けました。2匹はじゃれ合ったり、キャットフードを奪い合いながら、部屋中を駆け回ります。

来客があると、2匹の性格が態度にあらわれます。ハンナは、おっとりとした物腰で、おもてなしの構え。コタローは、色艶が映え精悍な風貌なのに引っ込み思案。玄関に人の気配を感じると、すかさず奥の部屋に身を隠し、お客が帰るまで姿を見せません。

仲睦まじくわが家の一員として暮らしてきた2匹に異変が訪れました。娘に長男が生まれたのです。同じフロアの一角に、長男用の居場所が設けられました。当初、2匹は、この新参者を遠巻きに傍観していました。やがて、ハンナの方が親近感を増して距離を縮めてきます。コタローはよそよそしく、敬遠気味です。世話人は長男の育児に追われて、2匹への関わりが手薄になり、ちょっと寂しげな素振りも見せるように。

長男がヨチヨチ歩きはじめると、ハンナを追いかけて、しっぽをつかむ。しつこくされると、ハンナからパンチの一撃。長男はベソをかき・・・。

この先、この三角関係、いや四角関係、一体どうなることやら。



コタロー(左)とハンナ

(小山5丁目町会 石井恒男)

シリーズ 駅前再開発

⑤ 武蔵小山の思い出と再開発への期待

昭和元年創業「鳥勇」



▼「鳥勇」の歴史

武蔵小山商店街の老舗焼き鳥店「鳥勇」。その歴史は昭和元年に遡ります。現在の中原街道沿いのパルム商店街入り口に店を構えたのが昭和元年。当時は、鶏肉専門店でした。その後、店の一角で、鶏の皮・レバー・砂肝を焼いた焼き鳥を売り始めて人気を集め、2店舗目の駅前店では、仕事帰りのサラリーマンたちに愛される店として定着。現在は、再開発に伴い、駅前店は場所を移して仮店舗として営業しています。

武蔵小山ならではの地域性に目をつけ、父親の2代目・修平さんは、駅前には鳥勇2店舗目を開店。仕事帰りのサラリーマンが、焼き鳥を片手にちよつと一杯飲む気軽さがヒットし、武蔵小山を代表する店として多くのファンが訪れるようになりました。板倉さんは、「駅を降りると、焼き鳥を焼くモクモクとした煙に、路地裏の赤ちようちんの風景は忘れられないですね」と、かつての武蔵小山の思い出を語ってくれました。

▼再開発への思い

そんな風景も駅前再開発に伴い、昭和から徒歩3分の場所に仮店舗を構えて1年半がたちます。昔懐かしい雰囲気が消えてしまったことへの寂しさはありますが、板倉さんは、「まちが新しくなっても、昔と変わらず、訪れた人たちがそぞろ歩くような開発になればいい。種類に富んだ店が増えれば、武蔵小山へ遊びに来る人たちの楽しみと地域活性化につながる」と、再開発への期待を話してくださいました。

再開発後の鳥勇は、駅前に出店するかは未定とのこと。今はただ、「これから鳥勇を訪れるお客様に、先代から引き継いできた味と、創業当時から欠かせない秘伝のタレ用の醤油を提供してくれたい」と、酒屋など、地域のつながりを守り続ける「酒屋」の言葉に、老舗のこだわりと、変わらぬ店の意志を強く感じました。

再開発後の鳥勇は、駅前に出店するかは未定とのこと。今はただ、「これから鳥勇を訪れるお客様に、先代から引き継いできた味と、創業当時から欠かせない秘伝のタレ用の醤油を提供してくれたい」と、酒屋など、地域のつながりを守り続ける「酒屋」の言葉に、老舗のこだわりと、変わらぬ店の意志を強く感じました。



多くの人で賑わう夕方の鳥勇

◎各ご家庭に配布しております。一部ずつお取り下さい。次号『まちかど』は9月20日(水)発行の予定です。

「まちかど」は、品川区役所ホームページからもご覧いただけます。 <http://www.city.shinagawa/tokyo.jp/> 古紙を配合した紙を利用しています。